



#### 「藤原琢也さんを偲んで」 ニャンコ先生

巣鴨カフェの山本さんが逝ってから、半年も経たない4月10日藤原さんが逝ってしまいました。しかも彼は当日目白カフェに参加し、会終了後何人かと食事に行った先で倒れ、そのままだったそうです。

「シャローム」、「巣鴨カフェ」、その設立には彼のご尽力が大きかったと聞いています。先月3月も北千住、亀有のカフェ設立をサポートしたと聞いています。

昨秋以来少しですが他のカフェへ伺い勉強させていただくようになって、驚いたことは、彼はどのカフェにもいました。設立だけでなく、その後もずっと応援して思いました。そして彼のテーブルからは笑い声が聞こえてきます。これが凄い、カフェは個別面談ではありません。たまたま席が同じになった数名の方と短い時間の間に話をし、それをいとも簡単に、笑い声を作る、カフェの目的の一つだと思いました。私には大難問です。また彼は「シャローム」は10時開始ですが、9時には来ています、多分他でもそうだと思います。10日当日も安藤先生をお迎えに車で待っている時、カフェ参加者7名の方と一緒に終わった終わりのスピーチで言っていました。はやく行き、何かと手伝い、準備していました。

その他医療用ウィッグのリユースの活動もしてたようです。内容はわかりませんが今後誰か後継者があればと思いました。甲状腺がんからリンパへ転移したとも聞いています。つらかったと思います。

不謹慎かもしれませんが昔読んだ漫画の主人公の言葉を思い出しました。

原作・ジョージ秋山・ビッグコミック・「浮浪雲」より

浮浪雲「おまえさん、病気になってもいいが、病人になるんじゃないよ」  
ご冥福を祈ります。



Photo by Y.Hiromi



#### 「気まぐれウォッチング」 ミニオン

ぶらり散歩していて 公園のベンチに腰掛けて 何かを感じるのが好きなんです。ちょっと変人にならないようにしなければいけません。

作曲家 作詞家やデザイナーが街でイメージがわいてくるなんて話があるではありませんか。

気まぐれウォッチングから色々なイメージ。心の中で楽しむのです。幻想の世界。過去 未来。「占い師でもあるまいし」と言われそうですが 楽しいですよ。皆さんもさりげなくやってるのではありませんか？  
笑顔の人。悩んでいる人。独り言をぶつぶつ言っている人。カップル。親子連れ。友達どうし。ペットを連れて。外にはでてこないものをさぐるのです。

ワンちゃん連れの方がいました。一步も歩かないのです。大きなワンちゃんでした。太りすぎ？老化？違っていました。飼い主がお散歩をあきらめて帰ろうとしました。すると元気に走って帰り始めました。楽しい行動でした。

皆さんも外にでて「気まぐれウォッチング」しませんか。

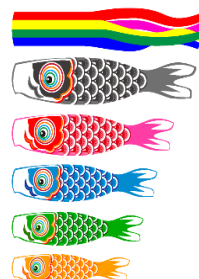


Photo by ミニオン



## 「人の温かさを感じる」 岡ちゃん

昨年12月、福島県に住む母方の伯母が94歳で亡くなりました。東北の震災で長年暮らしていた家を無くし、県南にある白河市に移り住んでいました。5人姉妹の長女として、従姉夫婦と一緒に実家を守ってきました。

伯母と、伯母の長女である従姉夫婦は、以前、コロナ禍に亡くなった私の母の葬儀に来てくれました。福島県から茨城県までの車の移動。身体が不自由な伯母にとって、負担は大きかったと思います。コロナの心配など、付き添ってきた従姉夫婦の気持ちを察すると計り知れません。伯母の葬儀は家族葬ということで参加せず、2月の連休に夫と2人で白河の実家を訪れました。静岡と所沢の叔母家族も来ていました。従姉夫婦は、久しぶりに訪れた私達に古いアルバムを見せてくれました。亡くなった伯母が海外旅行に行った写真など、私達の知らない伯母の思い出を話してくれました。地元の野菜を使った手料理とお寿司をいただいた後、車でお墓参りに行きました。街の名所を案内してくれたり、久しぶりに会う家族の為に、記念写真を撮ってくれました。静岡と所沢の叔母家族も自然に笑顔になっていました。

私に出来るおもてなしは何か。相手に思いやりを持てば、伝わることもあるかもしれない。私に出来ることをすれば良いのでしょ。白河の従姉夫婦と、静岡と所沢の叔母家族との触れ合いで、人の温かさと、胸が熱くなるのを感じました。当たり前かもしれない触れ合いを、とても貴重に感じています。



Photo by Y.Yasuo

## 「最近読んだ本 生活支援の場のターミナルケア 介護施設で死ぬということ

1章 最期をどこでむかえるか

高口光子 講談社」

2章 親の死に方を子どもが決める

3章 命を最期まで支え抜く(第1話～第8話)

著者の高口光子氏は、理学療法士、介護支援専門員、介護福祉士、現在は介護現場の

コンサルティング等をされています。まず、1章、2章は亡くなる時の最期の場所、口から食べものを摂取できなくなった時どうするかなどの延命処置について詳しく説明してあります。

3章は、8人の終末期の方の家族と看護介護の人々の対応や心情が克明に記されています。100人いたら、100通りの最期があり、どれが正しいというものはありません。ご本人のために、右往左往し、悩み、こだわる。それぞれの最期、その人らしい最期があつていいというのです。死を目前にすると、予め決定していた延命処置などが、覆ったり、家族間で意見が異なり揺れたりするのが当たり前なのだということや、突然、家族から無理難題を頼まれそれに全力で応えようとする看護介護の現場の方たちが印象的でした。改めて強く感じたのは、ひとは、家族、看護、介護、医師、薬剤師、理学療法士等々、大勢の人の手をかけて送られて逝くのだなということです。

3章だけでも読んでいただきたいとおもいます。



岡ちゃん

読みたい方はお貸しします。お声をかけてね!



Photo by Y.Hiromi

ありがとう

岡倉天心記念がん哲学外来・巣鴨カフェ「桜」

[sugamocafe.sakura@gmail.com](mailto:sugamocafe.sakura@gmail.com)

<https://sugamo-sakura.com/>

後援：一般社団法人がん哲学外来

代表 西原 光治  
編集 浦川 慶子

心動かされるエピソードや素敵なお写真をいつもありがとうございます

